

エンカウンター (ENCOUNTER)

第230号

2021年6月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

佐生健光『キリスト教と称名』より (15)

横川法語、一枚起請文、歎異抄

わが国には、昔、中国から渡来し、日本で育った別の「称名」があった。それは仏教浄土門の念仏と言ひ、わが国の特に庶民の信仰として定着し、歴史の上に確固とした足跡を残している。その指導者として、3祖師の名があげられる、最後に、その信仰をかいま見て、この文章の終わりとしたい。

ここで3祖師の「称名」を解説するつもりはない。また、私の力ではとてもできないことである。ただ、私は3祖師が書かれた「称名」に関する短文を読ませて頂いて、大きな感銘を受けてきたものである。それはまた、私がキリスト者として「称名」を続けるうえで、大きな示唆を受けてきたものである。それは、源信・恵心僧都の「横川法語」、源空・法然上人の「一枚起請文」、そして愚禿・親鸞聖人の「歎異抄」の中の上人の言葉の一部である。

祖師方は、中国の僧、善導（613－681）を共通の師としておられるが、わが国での先輩格は、恵心（941-1017）であり、法然（1133-1212）、親鸞（1173-1262）と続く。祖師方は、浄土三部経のうちの大無量寿経にある、法蔵菩薩の第十八願を「称名」の中心におかれる。その内容をごく簡単に言えば、「阿弥陀仏の名を称える者は阿弥陀仏の国・浄土・に生まれる」ということである。

仏教の基本的原理と、キリスト教のそれとは異なる。キリスト教では、この世界を創造された神がおられ、万象は神の意志によって動く。そして、世界は始めと終わりがあり、終わりには最後の審判がある。最後の審判に合格した者だけに、永遠の命が与えられ、天国で生きることが許される。キリスト教の救いとはこのことを言う。

しかし、仏教には、創造神はなく、万象は因果律によって動き、時間は無限の過去から無限の未来に向かって走る。世界は6つに仕切られ、生きとし生けるものは、この6つの世界のどこかで生きることになる。命終われば、その世界で行なった業によって、次に行く世界が決まりそこで生きることになる。よい業を残せばよい世界に行けるが、悪い業を残せば悪い世界に行かなければならない。この関係は永遠に繰り返される。この事を六道輪廻という。これらの世界を超えて、浄土は存在し、ここに生きるのを許されること

を成仏と言う。そのとき、はじめて人は、輪廻を超えることができる。この事を仏教の救いという。

我が国に中国経由でもたらされたのは、大乘仏教といい、聖道門、浄土門に大別される。三祖師は、上記のように浄土門の方々である。

このように、仏教とキリスト教は基本線が異なっているが、その信仰を「称名」という側面から見た時、その類似性に一驚するのである。

既に述べたように、私にはこれを論じ、解説する力はないが、長い間親しんできた上掲三祖師の短文を、キリスト教の立場から言い直したらどうなるかということ、思い立ち、これを以下に述べることにした。

祖師方の文章を区切りごとに、番号をつけさせていただいて記述し、その後で、番号に準じて拙文を記載していくことにしたい。

横川法語 源信・恵心僧都

1) まず三悪道を離れて人間に生まること大きなるよろこびなり

身は賤しくとも畜生に劣らんや、家は貧しくとも餓鬼に勝るべし、心におもほことかなはずとも、地獄の苦に比ぶべからず、世の住み憂きは、厭ふたよりなり。このゆゑに人間に生まれたることを喜ぶべし

2) 信心あさけれど本願ふかきゆえに、たのべば必ず往生す 念仏ものうけれども称ふれば定めて来迎にあづかる 功德莫大なるが故に本願に遭ふことを喜ぶべし。

3) また云わく、妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念のほか別に心は無きなり。

「臨終の時までは、一向妄念の凡夫にてあるべきぞ」と心得て念仏すれば、来迎にあづかりて蓮臺に乗ずる時こそ妄念をひるがへして悟りの心とはなれ

妄念のうちより申し出したる念仏は、濁にしまぬ蓮のごとくにて決定往生疑あるべからず

キリスト教式横川法語・私案

1) まず、人間に生まれたことは、大きなよろこびである。神により、人間は永遠の生命を生きる望みを与えられたからである。身は賤しくても、家は貧しくても、心に思うことはかなえられなくても、嘆くにはあたらない。そのような者こそ救いの近くにいるからである。世の中には多くの忌まわしいことがあるけれど、それが、永遠の命を望むてだてとなる。だから人間に生まれたことを喜ぼう。

2) 信仰がなくても、主が十字架に架かり給うて私たちの罪を贖われたので、主の御名を称えるのは物憂いが、称えれば必ず主がお迎えにこられ、復活にあづかることができる。この賜物は人の思いをはるかに超えるものだから、私たちは主のものとされたことを、大きな喜びとしなければならない。

3) もう一言。妄念はもとより、罪人身そのものから出たもの、だから心は妄念のほか何もないのだ。「死に至るまで、私は妄念に満たされた罪人だ」と心得て主の御名を称えれば、復活し主の御許に召されるのである。その時こそ、罪の身は全くきよめられ、私たちは神の国で永遠の命をいただくことができるのである。このことは決して疑ってはならない。

一枚起請文 源空・法然上人

- 1) もろこし我が朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるる觀念の念にもあらずまた学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず ただ「往生極樂のためには南無阿弥陀仏と申して疑なく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには別の子細候はず
- 2) 但し三心・四修と申すことの候ふは皆決定して「南無阿弥陀仏にて往生するぞ」と思ふ中にこもり候なり
- 3) この外に奥深きことを存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候ふべし念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、唯一向に念仏すべし。

キリスト教式一枚起請文・私案

- 1) 諸外国、わが国の学者、権威者たちが、昔から探求した結果もたらされた論理による「称名」ではなく、また学問をして「主の御名を称える」真髓を探り当てて称える「称名」でもない。ただ「救われるためには『我が主イエスよ』と称えて、疑いなく永遠の命をいただいたのだ」と思って称えるほかには別になにもない。
- 2) ただし、律法による義、信仰による義は皆、『我が主イエスよ』と称えて、永遠の命をいただくのだ」という称名のうちにこもるのである。
- 3) この外に深い真理を知っていると言う者は、イエスからも聖霊からも見放され、父なる神の愛からもれることとなる。御名を称えようとする者は、たとえ福音の真理をよくよく学んだ者であっても一文字も読めないほどの愚者となって、無智の者たちと一緒にあって、学ある者の素振りはずに、ただただ称名することである。

歎異抄より 愚禿・親鸞聖人

- 1) 親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」とよきひとの仰を被りて信ずるほかに別の子細なきなり 念仏はまことに浄土にうまるるたねにてはんべらん、また地獄に墮つべきき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり
- 2) たとい法然上人に騙されまゐらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候 その故は自餘の行を励みても仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にも墮ちて候はばこそ「騙されたてまつりて」といふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし

キリスト教式歎異抄より・私案

1) 私は「ただ『主の御名』を称えて永遠の命をいただきなさい」と、良き師の言葉をお受けして、称名するほかに別に何もないのである。

称名はほんとうに天の国に生まれる種となるものか、また、地獄に墮ちる行いとなるものか、全て、私は知らないのである。

2) たとえ、小西先生に騙されて地獄に墮ちてしまったとしても、すこしも後悔しない。そのわけは、ほかの行・信仰を励んでも天の国に行くことができる自分なら、もしも、主の御名を称えて地獄に墮ちたら、それこそ「騙された」という後悔もあるだろう。しかし、私は称名以外のどのような方法も実行することはできないので、もし「称名」がなければ、私の行くところは地獄と決まっているのだ。

まとめ 横川法語

横川法語の第一段は、人間に生まれた喜びを述べている。三悪道、すなわち地獄道、餓鬼道、畜生道、にいる限り救いにあづかる道は遠い。人間に生まれた一番の喜びは、経文を知り、「称名」によって救いにあづかる機会を与えられたからである。この喜びに比べたら、身分の低さ、家の貧しさや、何も思いどおりにならない苦しさなどは、問題にならない。だいたい世の中には忌まわしいことがたくさんあるが、そんな世であればこそ、私たちは、この世から天の国に生まれ変わりたいという願いを持つようになるのだ。そんな人が、救いの一番近くににいるのだ。だから、人間に生まれたことを喜ぼうではないか。

先に述べたように、仏教とキリスト教の世界観の相違はあるが、「貧しい人間ほど救いの近くににいる」という理由が、人間の喜びであるというところは、全くの共通項となる。

このことを念頭において、第一段、第二段、第三段を読む時、我々はこれを我々の信仰の書としても違和感を覚えることはない。

横川法語 (2)

そんな人間はしかし、信心は浅く、念仏は物憂い、と源信は言われる。私たちも、山を移すほどの信仰はおろか、信仰と言えるものはないに等しいし、「称名」も心頭を滅却して、清い心で、御名を称えているわけではない。しかし、聖書には、称名するについて何の条件もない。十字架に架かり給うた主の血潮は、そんな者の上にも滴り落ちる。罪の増すところ、恵もいや増す。主はこのままでよいから称名せよ、と言われる。神のアガペーは計り知れず、我々は福音に出会ったことを喜ぼう。

付け加えて言う。そのような罪人の心は、妄念に満たされており、妄念のほかに心はないといってもよい。それは死に至るまで変わらない。我々は、そのことを十分に心得て称名しよう。主はそのような者を常に義として下さりつつ、天の国への歩みを共にして下さるのだ。そして、天の国に召されたとき、我々はすべてを悟り、天の国にふさわしい人間となって主の御前に立つことができるのである。このことは、決して疑ってはならない。

一枚起請文

一枚起請文では、横川法語の前段を省略し、称名に集中する。ただただ称名することを強調する。ただただの称名とは、妄念に満ちた凡夫の称名である。法然上人は、ほかに二つの称名があることを指摘する。一つは、東西古今お、学者や権威にある人たちがもたらした論としての称名であり、今一つは学者が研究の結果、その真髓を探り当てて称えるものである。「称名」とはそのように難しいものではなく、「救われるためには、ただ救い主の御名を呼ぶだけでよいのだ」と説く。そして、仏教でいう三心・四修は称名にこもるものである、と言われる、イエスの御名を称えることによって、我々は神の前に律法の行いを実行したもの、信仰によって主の贖いを受けたものと見做される、とするのと同じである。

このほかにもっと深い真理を知っていると言うものは、救いからもれるぞ、と、法然は手厳しい。我々の称える称名は、横川法語にある妄念に満たされた罪人の「称名」に外ならない。だから、どんなに学問のある人も、一字も知らない無学の唯の人となって、「救い主の御名を称え」なければならない。

あなたはどのように称名するのか

それでは、あなたはどのように称名するのか。

私は、『ただただイエスの御名を称えて』で救われよ」という小西師のお言葉を受けて称名するほか、別に何もないのである。実際、称名のほかに大先生や、大司教から聞いたわけでもないし、自分で研究し納得して称名するわけでもない。

もし、称名して、地獄に落ちても、もともと地獄に堕ちても致し方ない自分なのだから、誰を恨むわけもない。

以上でこの項を終わることになるが、念仏について少々付け加えておきたいことがあるので、次に述べることとする。

浄土門の方々は、今でも祖師方の教えを固く守って、念仏を続けておられるが、歎異抄にもあるように、浄土行きが決まるのは、初めに念仏をしようと思い立って念仏したその瞬間である、と聞いている。しかし、その後も多くの念仏を称えておられるのは何故か、とお聞きすると、「それは阿弥陀如来に対する感謝、報恩のためである」という答えが返ってくる。

浄土門の方々の念仏

ローマの信徒への手紙 10・13 から、私たちも、主への感謝の念仏なるものがあるが、それは称名に込められていることを、再認識するのである。「称名」は、救われるための方法であることは言うまでもないが、主への様々な願いと共に、また、様々な感謝が込められていることは、旧約聖書の時代から、引き継がれていたことである。

今一つ、浄土門の方々は、浄土に生まれるか否かという問題を「後生の一大事」といって、人生の最も重要な問題としておられる。その鍵として「念仏」を称えておられる。

私たちも、全く同様な理由で天の国に生まれることを、人生で最も重要な問題であると思う。だから「我が主イエスよ」と、「称名」を実行しているのである。たしかに、この世にあっても、重要なことは多くある。しかし、後生の一大事が確定してから、その他のことに手を下しても遅くはないが、確定しないまま生を終えるならば、それは、もはや手遅れと言うことになるのである。

おわりに

以上、キリスト教の「称名」について述べてきた。これは、我が師・小西芳之助先生が伝道のご生涯の後半で特に力説された講説を、旧新約聖書の聖句と、わが国仏教浄土門の祖師方のお言葉によって確かめる方法をとった。結果、どこか先生の意に反する部分があったか、或いは、先生の信仰を私流に解釈してしまった部分があったか、ひそかに恐れるものである。しかし冒頭に述べたように、このことはいつか、誰かがもっと完全な形でしてほしいことである。拙文が、そのささやかなつなぎの役目を果たすことができたなら、これほどうれしいことはない。

後生の一大事を考えるとき、「主イエスの御名を称える」称名の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。こう考えて筆を執ったが、それはあまりに不遜なことであったかもしれない。

私は罪びとである

イエスは人々の罪を贖うために十字架に架かり死に給うた

私はその贖いを頂くため主の御名を称えた

私は救われた

なぜなら「主の御名を称えたものはすべて救われる」とあるからである

我が主イエスよ 我が主イエスよ 我が主イエスよ

全てはこれから始まるのである